

新しい年、御子イエスが降誕した事柄から出発しよう。なぜ降誕が起こったのか、という理由から。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(ヨハネ 3:16)」。これがクリスマスの所以。代名詞を意識すれば「神は独り子を賜った。かくのごとく世を愛したから」と訳せようか。

神が、かくのごとく愛した「世」とは何か。文脈から、茫漠とした世界でなく、「人間すべて」のことだと分かる。続く「独り子を信じる者が～」といういわば「奥の間」へ踏み入るより前、神は世の不信仰な人間すべてを、かくのごとく愛した。

「独り子をお与えになった」降誕は、そのまま「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された(ヨハ 8:32)」と言い換えられよう。

独り子を十字架で犠牲にしてまで、かくのごとく、罪人たる「この私」が愛されている。救い主降誕の奥底には、神の愛と、十字架の死が響いている。

続く「信じる者(ヨハネ 3:16)」とは、褒賞のように「永遠の命」が得るための条件ではない。とてつもない神の思いを、我が事として受け取った者を「独り子を信じる者」と表現しているのではないか。「独り子をお与えになった」愛に、衝撃を受け、愕然となり、胸が熱くなり、静かに涙を流し、固まった心身が溶解し、いつのまにか自分が変化している。愛を受け取った感じ方は、一人ひとり異なる。

どうすれば「独り子を信じる者(3:16)」になれるのか。頑張って「我」を手放し、「教会の制服」に着替えることではない。愛されるまま悠々としていればいいんじゃないか。

あえて言ってしまう。独り子を信じ、そびれてもいい、救いや永遠の命が分らぬともよい。信じているのか、信じていないのか揺れ動くならば、そのままでもいい。信仰は、自分の感覚で判定できるものでもないのだから。

ただ願わくは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世(不信仰者のすべて)を愛された(3:16)」真実は、何とか受け取ってほしい。ほい、と不意に手渡され、はずみで受け取っているなら、それを手放さないでいてほしい。

皆さんの耳にタコができてでも言い続けたい。神は、世のすべての不信仰者を「独り子をお与えになったほどに」愛した。

私たちは不信仰者のまま愛され、罪人のまま愛されている。それほどの愛の方が「御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずはない(ヨハ 8:32)」。

「独り子を信じる者(ヨハネ 3:16)」とは何か。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された(ヨハ 8:32)」ほどに、「この私」が愛され、顧みられ、十字架という代価で贖われていることを、自分の一大事として生きる者。

今、一大事にならなくとも、ほいと手渡されている神の愛を、そのまま抱え続けていけば、必ずや一大事となるだろう。誰もがやがて「死の門」を通るのである。

「主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ、墓穴に下ることを免れさせ、わたしに命を得させてくださいました(詩編 30:4)」。

詩人が実感している「神の命」は観念ではない。敵との戦い(30:2)、病や怪我の癒し(30:3)と連続する、永遠の命との現実的な一致だ。「独り子を信じる者」が与る永遠の命も(ヨハネ 3:16)、世にある内は私たちの現実。神が愛した世のために(3:16)、私たち教会は仕えていく。



《おまけのひとこと》

旅に必要なものは地図や情報ではない。そこに「発心」一つあれば、場や風景は自ずと動き出す。どこへ行っても神に愛された世。そして何と多様な姿か。多様さは隣人あたりがもっとも著しい。